

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和四年七月九日(土曜日) 午後五時開演

狂言 膏薬煉(こうやくねり)

鎌倉と上方でそれぞれ大名人を自称する膏薬煉の二人が、互いに相手の噂を聞き、腕比べを思い立って街道で行き会います。名馬生食をつなぎ寄せた鎌倉の馬吸膏薬、八千人引きの大石を持ち上げた上方の石吸膏薬、各々膏薬司を頂戴した先祖の名誉を語り、片や海に生える竹の子、対して空を飛ぶどぶ亀をはじめとする家伝の薬種を明かす、という途方もない自慢の果てに、鼻に膏薬を塗り、吸い寄せて、実際の効き目を試し合います。しやくり引きにして負けた方の言い訳も聞いておきましょう。

能 岩船(いわふね)

平和と繁栄を謳歌する御代に、賢王の命を受け住吉の浦へ急ぐ臣下たち(ワキ・ワキツレ)がいました。浜の市を立て、高麗・唐土の宝を買い取ることが任務です。宝の市には大勢の人が集まりました。そこには銀盤に玉を据え持つ唐人風の少年(前シテ)もいて、臣下が声を掛けると、少年は大和言葉で大君の徳治を讃歎し、竜女の如意宝珠を捧げたいと答えます。いにしえ大君がこの地に行幸され、住吉明神が神詠で迎えた有様が偲ばれ、当代も今宵は奉祝の市が賑やかに立ち、松風のさわやかな浦の風光は唐土潯陽の江にも勝ると思われず。少年は天の深女を名乗り、「天から大君の御代に宝が下されることになったから、天の岩船を漕ぎ寄せる」と告げて月空に消え失せます(中入)。所の者(アイ)が宝の市が立ったことや住吉明神の縁起を述べ、奇特を拝むよう触れた後、海中に住む竜神(後シテ)が現れ、宝を満載した岩船を守護し、拍子を取って岸に引き寄せます。金銀珠玉は山のごとく、永遠の繁栄が約束されたのでした。この明快な祝言性が喜ばれて、本曲は半能で上演されたり、早くから単純化されてきました。原作は前シテが老人(竜神)、天の深女がツレで出る構成と推定され、室町幕府の対明貿易を背景とするようです。(西村 聡)

前シテ(童子) 子(童) 面(童子) 黒頭 箔 水衣 腰帯 扇 珠
後シテ(龍) 神(龍) 面(黒髭) 赤頭 龍 龍臺 厚板 半切 法被 腰帯 扇